三七日

みなぬか

仕事やつき合いで、夜おそく帰宅するときは、かならず子供のためにおみやげを買ってくるというお父さんがいます。すし折だったりタコ焼きだったり、アイスクリームだったり、わずかなものなので、食べ盛りの子供たちは奪い合うようにして、たちまちのうちに平らげてしまいます。それをお父さんは、いかにも満足そうに眺めています。子供たちのよろこびは、そのままお父さんのよろこびです。なんとも微笑をさそう光景です。けれども、これを無条件に父と子の情愛のあらわれとみてしまうのには、ちょっと抵抗があります。子供たちにとって父親とはイコールおみやげではないはずです。

大慶喜

タコ焼き一個をよろこぶまえに、父母のいつくしみのなかで育てられていること自体をよろこぶべきではないでしょうか。

慶も喜も、ともに「よろこぶ」の意です。大慶喜心とは、信心をあらわします。もとより救われざる身が、み仏の願いによって救われるという、これにまさるよろこびはないはずです。それなのに、心から踊り上がるほどのよろこびがわかないのも「煩悩」のせいだと宗祖ご自身が述懐されました。目先の欲望にとらわれて、真実の見えない自分を見つめられたのです。